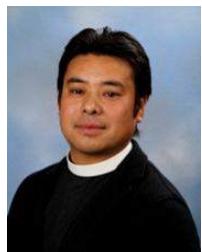


チャプレンより



林チャップレンは立教英國学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の授業ではさまざまなお話をしてくださいます。

という空気をひしひしと感じました。多くの学校経営者・関係者がこれらのことがあつ務であると考えているように感じました。競争の激しいマーケットで勝ち抜いていくためには信頼できる商品が必要になりますが、現代の多くの学校が打ち出している「主力商品」のひとつは英語教育でしよう。英國の地にある本学院も充実した英語教育を提供するために努力していますが、国内においても海外の学校に負

感謝してそれを食し、自分に与えられた命に感謝を捧げ、学び、遊び、休むという生活がここにあります。苦手な人とも共に同じ空間で生きる。時間を守り、人の話を聴き、偽ることなく謝るべきところは謝り、他者を思いやり、共に生きることを大切にすること。当たり前のことだと言われるかも知れません。魅力的なキヤッチコピーで溢れる現代社会においては魅力のないことかもしません。だけども、人として生きる上で、人生も豊かに生きる大切さを学ぶことが

A painting depicting the Nativity scene. In the center, the Holy Family is gathered around the manger: the Virgin Mary holding the infant Jesus, Joseph standing beside her, and the lamb. Three Magi are kneeling in adoration on the right, with one holding a gold vessel. In the background, a town is visible at night, and a camel train with camels and a caravan leader is on the right. The scene is set in a stable with a rocky wall and a starry sky.

コラム
2学期の行事
秋の味覚「R」
第二の故郷

目次		ページ	
第7回	チャプレンより	1	
2 学期 アウティング		2 ~ 3	
OPEN DAY		4 ~ 6	
夏休み	読書感想文	7	
教科レポート	社会科	クリスマス・プレゼント・ポックスづくり	8
教科レポート	数学科	因数分解コンクール	9
教科レポート	英語科	インタビュー	9
Cambridge Science Workshop		10	
UCL Grand Challenge Japan Project		10 ~ 11	
サリー大学と進学協定を締結、部活動の活躍		12	

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND

立教英國學院

GUILDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE
<http://www.rikkvo.co.uk>

27

ケンブリッジへのアウティング

高一一 櫻澤 菜奈子

今回のアウティングは往復五時間でケンブリッジに行つた。天気は晴れ。気温もちょうど良く、アウティングにはぴたりの日だった。

「ケンブリッジ」という名前はよく知っていた。大学があり有名なことも知つてた。だから、私はそれだけでケンブリッジのことを知つていたつもりだった。正直、大学があるだけなのだろうな、とあまり期待はしていなかつた。しかし、実際に見てみるとそれは私の大きな間違い。日本の現代的な大学とは大きく異なり、昔ながらの大学がたくさん並び、午後五時には素敵なクリスマスの歌声とともに街の明かりが次々とつき、大学帰りの若者の笑い声や話し声が響き、暗くなればなるほど、昼とは違う魅力を感じるようになつた。大学しかない静かな町だと思っていたが、逆に大学があることで若者の街を作り、街全体がひとつの大学の中のようで、私はとても憧れを感じた。

また、今回のアウティングに行つて、日本との大きな違いを感じたことがある。それは大学生の違いだ。日本の大学生は、ひとりでイヤホンをつけて、携帯片手に持ち歩いているイメージがある。しかしケンブリッジにいた大学生は、みんな楽しそうに会話を歩いていた。そこで、私はコミュニケーションの大切さを知つた。コミュニケーションによってその街の雰囲気が変わる。その街を行つた私たちのようないい気持ちになつた。

日本の大学生も少しでもこういった事に気づいて欲しいな、と思つた。また私もこれから意識したいと思つた。

2学期アウティング

P5-M3 THE MAKING OF HARRY POTTER



H1 Cambridge



H2 OXFORD



H3 LONDON





【その二】 裁判官はいかめしい黒ガウンをまとい、巻き毛のカツラを眞面目にかぶるらしい

【その三】審理中は表半官も弁護士(?)も意外に声が小さい
傍聴した審理では、モーツアルト風の裁

判官判事ではなかつたけれど、声が小さいのにはマイツタマイツタ……。ただでさえ外国語をリスニング、おまけに訴訟の英語

聞こえににくいから、余計に分かりにくいもの。

長い審理だったから、結局最後まで聞けなかつたけれど、最高裁に持ち込まれるまで、一体どれくらい審理が続いていたんだ

ろう？』と、『ふと思つた。よく考えたら、今日の審理で決着したんだろうか？』ひょっこりこつら長く、長く、焼く審理の一言を聞い

それについても「市民による民主的な政治」としては、長く、長く、細く、審理の一日至るのかも知れない。

の象徴の一つが『三権分立』だというはずなのに、最高裁判所の設置がたった五年ほど前のこと。英國では、議会が最高裁判所

を兼ねていたと聞いたけれど、この長い間立法・司法権の兼務で法が乱れることはな

かつたのか?それが現代まで続いていたイギリスにござつただ。もう一つのチャーチの Cabinet War

Rooms'、第二次世界大戦中の戦略本部である。しかも地下に作られた戦略本部。第二次世界大戦といえば、ゾイシゾヨーコソペ

次世界大戦といふは、ヨーロッパの水際の砦といふことだ。まず一帯を占領していたから、この地下基地は

ます秘密めいた空気がふんふんするではないか。お勧めの【高3井】メンヒによる

【三大みどり】を紹介する。

ある広さ しかし閉塞感が強し
「予想以上に広かつたが、地下というこ
ともあり、暗くて空気がこもつていて、チ

ヤーチルと同じ空気を吸っているかもし

「……外の新鮮な空気を吸えずに、働きづめであった当時の人のことを考えると、やはり戦時中のつらさを思い知らされましたが、ガイダンスでチャーチル首相も「」が大嫌いだったということを聞いて、少し安心した」

「〔その二〕 他の士官に比べると、ちょっと豪華なチャーチルの部屋

執務机があつて、ベッドも備え付けられている、少し広い部屋がチャーチルの部屋だつた。

「ベッドが（ちょっと）豪華。チャーチルが一晩中寝ることができた日は、三回しかなかつたらしい」

「……チャーチルのためのキッチンやダイニング、寝室が、私の部屋よりも小さくて、首相でも「」のくらいの部屋に住んでいたんだと、戦争の時の大変さが分かつた気がしました……」

「首相ならば豪華な部屋で暮らしてもいい身分なのに、キッチンはうちの家よりも小さいし、部屋も廊下と思うほど。窓もないし、薄暗いし、居心地悪そうだった……」

〔その三〕 電話

「形はとてもシンプルだった電話なのですが、色が白・赤・緑などがあつて、目にとまるものだった」

電話線はさすがに、天井からコードが垂れ下がっている造り。

アメリカのルーズベルト大統領と直接話せる電話もあつた。もちろん盗聴防止機能つき。戦時中の慎重さがしのばれる。な一角だ。戦争時代の遺産が隠れているとじく、国会議事堂のすぐそばにある。つまり官庁街にあって、今はとても瀟洒で閑静なCabinet War Roomsは、最高裁判所とともに「」のような窮屈な「」で、みな文句ひとつ言わず頑張っていたのかと思つたが、ガイダンスでチャーチル首相も「」が

「本部の真上を襲撃されても大丈夫なのか？」
の疑問でした。皆ひとたまりもなく死んでしまうんじゃないかなと思つたし、地震がある日本ではできないことだなど思いま
は想像しにくい。

「日本も先日内閣の地下室が数十年ぶりに開かれていたので、朽ちた状態を修復し、平和の尊さを云える博物館として一般

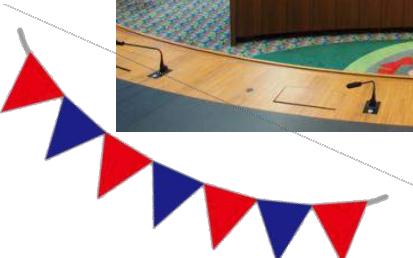
様々な地域を含む、ヨーロッパの大戦に臨んだ人々はもうそこにはいないが、その公開してほしい」

空间には、ここを歩き、座り、生活している人々の息づかいがあふれていた。

今年は終戦から七〇年。最高裁判所も地下の内閣戦時執務室も、今私たちの幸せな生活を様々に思い、振り返らせてくれる美に良いところだった。今度は時間を気に

せす、じつくりと審理をきいて意見をかわし、今は消えつたる戦争の記憶をもつと学んでおきたい。

卷之三



初めてのオープンデイ

小五

宮崎

ゆめ

一月一日、日曜日はオープンデイでした。小学生は、クラス企画で、クリスマスツリーの由来、飾りや星の意味、クリスマスに食べるお菓子についてなどを、分担して調べました。

一週間前から、オープンデイの準備期間が始まりました。いつもの一・二番教室から二番教室に移動して、オープンデイが終わるまで、その教室で過ごしました。小学生は、背景や模型はなく、調べたことを印刷して貼ったり、画用紙で星やクリスマスツリーの飾りを作ったりするだけでした。

が、それなりに良くできたと思いました。オープンデイ当日、二番教室には、大勢の人が集まり、小学生の企画を見てくれました。予想以上にたくさん的人が来てくれて、たくさんのうれしいコメントを書いてくれました。

他のクラスを見て回って、私が一番心に残ったのは、高等部二年二組のメモリー企画でした。この企画では、第二次世界大戦のことが展示されていました。広島に落とされた原子爆弾は、一九四五年八月六日八時十五分、地上六〇〇メートルのところで爆発しました。もうあのようなひどいことが、おこらないようにしたいです。

私はフランジメント企画では、商品として七〇から九〇ほどの作品を作りました。しかし三時五〇分ごろ行くと、作品が全部売り切れていて、びっくりしました。フランジメント企画では、商品が全部売り切れていて、びっくりしました。この企画は、毎年お客様に人気らしいので、来年も、商品が全部売れたらうれしいです。茶道企画のデモンストレーションは、一時十分から、一時四五分までありました。この日に向けて、たくさん練習をしてきましたが、六〇人ぐらいの人が集まつた本番で

は、緊張して二、三ヶ所間違えてしましました。

オープンデイが終わり、片付けに入つたとき、お客様が書いてくれた、たくさんコメントに気付きました。「少ない人数で良い展示ができたと思います。」というコメントや、イギリス人の方が日本語で「Wow! クリスマスツリーの糸の玉はすごかった。」などのメッセージをくれたので、うれしかつたです。

来年もこのような楽しいオープンディになるとうれしいです。

中二のオープンデイ

中二 柳田 麗安

立教に入つて二度目のオープンデイは、去年とはちがい、達成感でいっぱいだった。準備期間中に頑張ったこともあるが、なにより、お客様が楽しんでくれて、また去年よりもハイクオリティの企画を作るという目標をなしとげることができたからだと思う。

去年のこと思い出してみれば、オープンデイがはじめてだと、この理由に、自分のやるべきことをなかなか見つけられなかつたり、うまくいかなかつたりして、作業を途中で放り出して、小川先生やあさこ先生にたくさん迷惑をかけたと思う。結果、自分達の納得のいく企画を作ることができなかつた。今考えると恥ずかしくなる。今年は、完全とはとても言えないが、去年よりはまともになつたと思う。各自、やるべきことがあつてみんな意見を出しあつて、うまくいかないことがあつても、文句を言いつつも放り出さないでいた。それで、まだ直さなければいけないことなんてたくさんある。でもまずは「去年よりも良い企画を作る」という小さな目標を達成しなければならないと思った。結果、模型などの賞と総合三位で、自分の中の小さな目標を達成することができた。そしてこれが、

来年のやる気へとつながるのではないかと思う。

去年よりもまともになつたといつても、当然のことができるようになつただけで、けつしてまわりよりも進んでいるわけではない。だからこれからもまわりを見習いながら成長し続けなければならぬといふことを今回のオープンデイで学んだ。

オープンデイ準備期間

中三 西條 里菜

私にとって準備期間は忍耐の連続でした。準備期間に入る前、私は一週間勉強に手を付けずクラス企画に没頭できることに喜びを感じました。準備期間の初日も軽い気持ちで作業に取り組んでいました。しかし、二日目、背景を体育館で塗る時、全身で思い知りました。『この作業を一週間続けるというのはどれだけの力・精神力・忍耐が必要なのか』と。しかも十何枚という大きな背景を五人の仲間と協力して一週間で終わらせなければならなかつたのです。私は前の学校ではこのような作業にあつたことがなかつたのでさらに驚きました。

準備期間で一番辛かつたのは精神面でした。予定通りに作業が進まず焦る気持ちばかり募り、皆にストレスや疲労が溜まつて行き詰るばかりでした。けれど、互いが互いを応援しあつて少しずつ仕上げていきました。そして完成すると辛い気持ちが達成に変わり、仲間との絆が深まりました。またこの「耐え忍んでやり通した」ということが自信に繋がり、勉強や生活にも良い影響を与えてくれると感じました。

でも自分の人生に良い影響を与えることができるよう努力していきたいです。

OPEN DAY

クラス企画一覧

- P5.6 クリスマスツリー Christmas tree
- M1 寿司 Sushi
- M2 ゆるキャラだましい YURUKYARA SOUL
- M3 人生行路 The course of life
- H1-1 恋愛のすゝめ PLAY BOY HIKARU
- H1-2 るろうに剣心 RUROUNI KENSHIN
- H2-1 江戸村2015 THIS IS EDO
- H2-2 Memory



最後で最高のオープンデイ

高二一一 江部 あかね

最後のオープンデイは、今までで一番難しくて、大変で、辛かつた。しかし、今までで一番、みんなで考えて、真剣に取り組んだ、最高のオープンデイだったと思う。クラス企画のテーマは、広島に落ちた原爆弾についてだった。今年は、第二次世界大戦が終了して、ちょうど七〇年目ということもあり、このテーマに決めた。しかし、決めたはいいが、「原爆」というテーマは思っていた以上に「デリケートなテーマ」だった。クラス企画は、イギリス人も見る。どのように伝えることができるのか、日本人目線の意見を前面に出しても大丈夫なのだろうか、そんな話し合いを沢山した。結局、本当のことだけを伝えよう、原爆について考えてくれるきっかけとなればそれでいいのではないか、ということになつた。

私を含めてみんな、あまり原爆のことについて詳しいことを知らなかつたので、背景や模型などの各班に分かれた後は、情報収集から始めた。私は、焼死体の模型を作ることになつたので、できるだけ忠実に再現できるよう、様々な資料や画像を調べたが、それらは全て想像を絶するものだつた。言い方が悪いが、人間があんな風になるなんて信じられなかつた。真っ黒になるとは聞いたことがあつたが、聞くと見るのとでは、大きな違いがあつた。模型作りの情報収集の後は、いよいよ模型作りだ。今回私たちは、焼死体を新聞紙と金網で作つたが、予定の日程をそれほどすぎる作なく作り終えたので、終わつていなかつた他の模型を手伝うことにして。

そしてオープンデイ準備期間はあつという間に時間が経つていつた。前日の夜、私達のクラスは、全くといつていいほど、終わつていなかつた。まだ背景がつるされている途中だつた。模型は、背景をつるされ

終わつてからでないと設置できない。そのため組み立てにどれくらいの時間がかかるのか予想できない。もし組み立てが終わつても、ライトの設置やBGM、様々な物の微調整をしなければならない。そんな状態で私達は就寝の時間を迎えた。電気を消さしても、不安でなかなか寝付けない。明日の朝だけ、本当に終わるのだろうか。そんなことばかりが、頭の中を占め泣きたくなつた。私にとつて四回目のオープンデイ。今までこんなにも終わつてないことはなかつた。終わらなかつたらどうしよう、そう思いながら眠りについた。

当日の朝、起床のベルの音がした瞬間、ベッドから出て、急いで用意をした。教室まで走り、できる作業をした。クラスのほとんどが、朝食前に教室に集まつた。礼拝前、ホームルーム前も。全員が、本気で作業をした。

十時を少し過ぎた頃完成した。無事に完成了したときは信じられなかつた。完成できた安心感と嬉しさで一杯だつた。次の日、解体作業の時は、少し淋しかつた。一週間かけて作つたものが、解体されるのは一瞬だつた。そして、結果発表。全ての部門の発表に緊張したが、模型の時は特にそうだつた。心拍数が高くなり、結果を聞くのが本当に怖かつた。私達のクラスの模型が「一位」と言られた時、言葉にできないほど嬉しかつた。近くにいた模型班の子と二人で泣いた。その時がオープンデイで泣いた初めての時だつた。結局、私達は沢山の賞をいただき、総合優勝できた。

最後のオープンデイ、このクラスでのテーマで、できて本当によかった。高校二年だからこそできたテーマだと思う。沢山話し合つて、考えた。模造紙には自分達の意見を書かなかつたけれど、私達は一人一人意見を持つていて。今回を通して、知らぬ間に時間が経つていつた。前日の夜、私達のクラスは、全くといつていいほど、終わつていなかつた。まだ背景がつるされている途中だつた。模型は、背景をつるされ

最高のオープンデイになつたのは様々ある。このことも学んだ。

最高のオープンデイになつたのは様々な人のおかげだと思う。特に、担任、副担任の先生方、ありがとうございました。そして、クラスのみんなみんなとやれて良かった。ありがとうございました。

「縁の下の力持ち」

高二一一 牧 拓磨

オープンデイの主役はクラス企画やプロジェクトだが、それらをいろいろな角度から支えている人たちがいる。係本部だ。そのいくつかの係本部の中の一つに会計がある。「会計」、その言葉だけだと事務所の中でカタカタ計算機を使つていてようしかし考えられないが、立教英國の「会計本部」は少し違う。

中学三年の時の初めてのオープンデイ準備期間で会計本部の人たちが楽しそうに仕事をしていたのを見た時から早二年、会計本部長としてこの作文を書いている自分が少し不思議だ。そこで会計本部長として、この準備期間を振り返つてみたい。

会計の仕事はおおまかに道具の貸出し、作業場の管理・監督だ。聞く限り楽な仕事と思えるが、実はそうでもない。朝から晩までシャワー時間以外は基本シフトが入つていて。一番忙しいのは各食事前とその後。たくさん的人が物を借りたり、返しに来たりする。他にも道具や作業場を大切に使つてもらうために注意を呼び掛けたり、買う必要がある物品等について先生達と話し合つたりする。これら以外にも細かな仕事が多いため、クラス企画やフリープロジェクトにはほとんど参加することができない。それでもその代わりとなるくらいに、この仕事にはメリットがあると思う。

一つは、人との触れ合いがたくさんある



1.11

ことだらう。いろいろな学年、クラスの人々が来るため、たくさん話ができる。クラスの進行状況やちょっとした愚痴を言う人。模型の作り方やアドバイスを聞きに来る人。中には物を返すついでに一発芸をやつてくれる人までいた。そんな人たちとの触れ合いで、準備期間ならではのものだらう。もう一つは、会計本部長として仕事を終えた時の達成感は何とも言えないことだ。昨年の自分がいかに楽であつたか思い知る程忙しかつたが、終わつてみた今は、もうただ楽しかつた日々のように感じる。なかなか味わえない経験をしたと思つていて。第三者に聞くしかないのである。

悪い空氣にしたくなかったし、何よりも
周りに悔しい気持ちを見せたくなかった
から、早く気持ちを切り換えて明るくいこ
うと心に決め、作業に取り組んだ。意外と
古本屋の作業は大変だった。本の仕分けや
値段貼り、ざつと三百冊ある本を全てロフ
トや図書館からハサツに運ぶ事は、細かい
作業でもあり、力仕事でもあった。この作
業を終わらせてから、次に装飾の作業に取
り組んだ。最初の苦しかった気持ちはいつ
の間にか消え、みんなを驚かせるような古
本屋を作りたい！ そう思うようになつて
いた。他の係の力も借りて、一から装飾

高3一一 岡田 千加子
高校ラストのオープンディイ。毎年高3は
焼鳥やバザー、キッチンといった出し物の
お手伝いをする。今回私は古本屋のお手伝
いをした。実を言うと、私は最初から古本
屋をしたかった訳ではない。第一希望のじ
やんけんで負けて残っていたのが古本屋
だったのである。みんな希望通りで、楽し
そうな顔を見ていると、やるせなく、苦し
かつた。私のオープンドイは、こうした形
でスタートすることとなつた。

置かれた場所で咲きなさい

がで嘆きなさい



作りを始めた。久しぶりの装飾作りにて、こ
そり、初日にもかかわらず五時半に解散を
することとなつた。残り一日。私にできる
最大限のことをしようと思うと、たくさん
のアイデアが浮かんできて、その日はすぐ
に眠れなかつたのを覚えている。

次の日も朝から晩まで作業をして、つい
にオープンデイ当日を迎えた。オープン一
分前にもかかわらず、古本屋のあるハツ
ト前にはもう何人か列ができていた。オー
プンと同時にたくさんの方々が足を運ん
で下りり、クローズも一時間遅れとなつた。
何よりも、みんなが笑顔だったのが本当に
嬉しかつた。

どんな場所に置かれたとしても、その場
所で自分がどれだけ頑張れるか。それが全
てだと気付いた。

「置かれた場所で咲きなさい」
これが、今回のオープンデイが私に教え
てくれた事だ。

「置かれた場所で唉きなさい」
これが、今回のオーブンデイが私に教えたことを教える。それを教える。



【2学期の行事】

9月 6 日	始業式	10月 24 日～10月 31 日	オープンデイ準備期間
9月 7 日	高等部実力テスト	11月 1 日	オープンデイ
9月 9 日	源氏物語朗読劇鑑賞	11月 2 日	オープンデイ片付け、オープンデイ閉会式
9月 18 日	個人写真、卒業学年クラス写真撮影	11月 8 日	実用英語技能検定試験第二次試験（1～3級）
9月 19 日	Cambridge Science Workshop 報告会	11月 20 日	国際基督教大学 説明会
9月 20 日	UCL Grand Challenge Japan Project 報告会	11月 21 日	CAMBRIDGE 英検 KET、PET
9月 26 日	ロンドン日本人学校文化祭 訪問	11月 24 日	CAMBRIDGE 英検 FCE
9月 27 日	Apple Day 外出	11月 25 日～11月 30 日	期末考査
	第35回因数分解コンクール	12月 1、2 日	答案返却
9月 29 日	全校写真撮影	12月 3 日	スクールコンサート
10月 7 日	アウティング	12月 4 日	ELMBRIDGE VILLAGE キャロリング
10月 10 日	実用英語技能検定第一次試験（1級、準1級）		クリスマス礼拝
10月 11 日	実用英語技能検定第一次試験（2級以下）	12月 5 日	終業式礼拝 生徒帰宅
10月 13 日	Surrey University 説明会	12月 6 日～12月 11 日	中学部3年生補習
10月 14 日	全校歯科検診	12月 12、13 日	中学部・高等部入学試験A日程 中学部3年生帰宅
10月 18 日	生徒会主催 Guildford Shopping		
10月 23 日	教室、ドミトリー移動		

夏休み 読書感想文

だけのことを考えて います。他人を思いや
る気持ちを忘れて いています。
ぼくは、シンガポールに住んでいた時、
ハンドルの下に迷子の子供を見つけて、本食
べてあげました。

私が、今回読んだ「モモ」は、年齢もど
こからやつて来たのかもわからない、不思

やるうと思つてもできない世界
小五 矢野 正徒

ぼくは、世界でいちばん貧しい大統領の
ハービーという本を選びました。ぼくはな

この本を選んだかというと、大統領がな
ど貧しいかが不思議だつたからです。ぼく
のイメージでは、ふつうは大統領はお金持
だと思ったからです。だから「貧しい」

という意味を調べてみました。調べてみたら、生活が苦しいや心が満たされていないなどが書いてありました。ぼくは経験したことがないことです。だから興味をもつて読みました。本を見たときは、すぐに読めると思つたけれど、中身の内容はすごくむずかしかつたです。だからけつこう読むのに時間がかかりました。

この本は、大統領がアラシルで開かれた国際会議でスピーチをした話が書いてある。二つに亘って有关の項目がある。

ります、この大統領は南米の国ウルグアイからやってきた、ムヒカという名前です。

どの大統領よりも質素で、給料の大半を貧しい人のために寄付したり、農場で奥さん

とくらしています。古い車を自分で運転して、仕事に行つてます。ぼくは、まずここ

まで読んで、大統領はやさしい人だなあと
思いました。日本と比べて、すごい差があ

ると思いました。悪くなつた地球のかんきょうを話し合う会議でした。色んな国の代表

表者が貧しさをなくすのにはどうしたらよいのかをスピーチしました。でもよい意

見が出ません。ムヒカ大統領は、意見をする前にみんなに質問するように話し出し

ました。物をたくさん作って、売つてお金
をもうけて、そのもうけたお金でほしい物

を買う」とはよい」となのか。今の文明はこのようにずっと続いています。みんなはいつも「心をひとつに、みんないっしょに」と言っているけれど、それを忘れて、自分

中一 吉岡 美緒



秋の味覚 「Rudgwick Apple Day」

9月27日、毎年恒例の地元のApple Dayというお祭りに希望者全員で出掛けできました。

立教の地元 Rudgwick 村で開催されるりんご尽くしのイベントは天気にも恵まれ、多くの地元の方々が来場していました。会場には様々な種類の店が並んでいますが、どの店も家族や友人と出しているので非常にアットホームな雰囲気です。

人気があったのは日本では珍しいりんごのフレッシュジュース。りんごを潰してジュースにする様子が実演されて、とても甘い生のジュースを味わえます。他にも立教生に人気があったのは hog roast という豚の丸焼きです。りんごの特別ソースをかけて、パンズに挟んで頂きます。お腹が減っていて二個以上食べたという生徒もちらほら。もちろん英語でオーダーします。青空の下、友達と食べるお昼は格別です。

この Apple Day の目的は地域のイベントに参加するだけではなく、11月1日に行われる立教の Open Day のチラシを配るためにあります。下級生も勇気を出して、英語でいさつをしながら一生懸命宣伝をしていました。地元の方は立教のことをご存知のようで、当日を楽しみにしているとのこと。生徒たちも好意的な声を聞くことができて嬉しそうです。

今回も小学生から高等部三年生までが参加しましたが、生徒皆イギリスの週末をリラックスしながら楽しめたのではないかでしょうか。観光客ではなく一住民としてイギリスの文化に触れることができた経験は一生モノ。これからも積極的にイギリス文化を見て感じて成長してほしいと思います。

教科レポート

社会科
クリスマス・プレゼント・
ボックスづくり

～10五年二学期の小学生たち
ルドワーク
チャリティー・クリスマス・プレゼン
ト・ボックスづくり
皆さんは紙の箱を自分でつくる、クリスマス

スプレゼントというものを知っていますか。教会のチャリティー活動のひとつに、それがあります。靴箱はそこそこの大きさのものが入って、しかも角形で丈夫。その靴箱に、様々なものを詰めて、クリスマスに贈るのです。地元クランリー村には、Children's Shoebox Appeal という協会があり、ルーマニアのあるまわしい村へ毎年多くのクリスマスボックスを贈っています。そんなプロジェクトに、小学生も参加しました。

保護者の方達に連絡をしたあと、子どもたちに「靴の空き箱にプレゼントを詰めてある人に贈るうと思うのだけれど」と切り出し、村の人々の写真を見ながら、どんな人達だろう?どんな生活をしているだろう?とあれこれ意見を出して考えたら、自然に、どのようなものを詰めると喜んでもらえるかな?という方向へ。「贈りたい」という気持ちが芽生えたところで、贈る相手の性別と年齢を決める事になりました。男子チームは「自分と同じ年代なら何がいいか分かる」ので、男の子に、女子チームは「ちょっと小さい女の子なら、どんなものが欲しいか考えやすい」そうなので七歳前後の女の子用をイメージして、準備する

ことが決しました。気持ちが大切なので、週末のスクールショッピングでお菓子が買えるぐらいのお小遣いを一人ずつ出しあって、十二ポンド以内三人で一つのクリスマスボックスを作ります。実際にTESCOスーパーで買い物に行き、予定の買い物リストと商品の値段を見比べながら、買い物力ガッガリ入れるもの、一二ポンド以内で買うのはかなり難しい！贈る意味と値段を比べて、考え込むことになりました。

さて、スーパーで買ってきた小学生達。スーパーといつても、TESCOという、おもちゃやDVD、家電製品、衣類までそろった英国ではおなじみの大型スーパーで買ってきたのです。女子チームは、リストに従つてあれこれ見ながら、決めるのとともに悩みました。子ども用の歯ブラシにすると、かわいいし、子どもの口サイズだからぴったりだけれど、一ポンド以上もする。大人向けの歯ブラシにすると、二五ペニスで二本入りだけれど、ちょっととそつけない。子ども向け歯ブラシは三歳以下用だし：大人向け歯ブラシにすると二本あるから長く使えるけど……「色の組み合わせが赤と緑でクリスマスカラーだから、大人用にする」児童自身が考えて決定。色鉛筆セットとぬり絵を買うときには、鉛筆削りで悩みました。「色鉛筆なら鉛筆削りがほしいなあ」「でも鉛筆削りがついたものにすると、高くて他のものが買えない」「クレヨンなら安いよ。クレヨンにしよう？」「クレヨンは手が汚れない？」「じゃあ、クーピーにしようよ。削らなくていいし、使いやすいし。」九点買って、残り一

必ず入れるもの。金額的に可能な限りに入れたいもの、役に立つものクリスマスらしく嬉しい気持ちになるものなどを、細かく思いました。が、そのメモを持つていく担当が、スーパーには違う用紙を持ってきてしまいました。でもそこは大丈夫！よく話し合っていましたので、みんなが買うものをしっかりと把握できていました。なかでも、ニット帽子で貢える金額のものを見つけたときは、他のものと比べて高価だったのにもかかわらず、迷いなく購入を決めしていました。長く使えるて、役立つものを、という視点がはつきりしていたからですね。感心しました。

買い物を終えた次の授業時間に、贈る相手のことを考えながら、ていねいにクリスマスカードを書き、箱に詰めてきれいに包みました。女子チームが入れたものは、靴下二足、小さなぬいぐるみ、リンス・イン・シャンプー、歯みがき粉＆歯ブラシ、ヘアゴム、カシ、クーピー一二色セット、ぬり絵。男

六ポンド程度になつた時、「女の子だから、最後はクシを一本入れよう」と意見がまとまりました。

でもクシは二ポンドもする。さて、どうしよう。ちょっとしたお菓子で「イン型チヨコレーートの小袋を入れていましたが、そこで先生の提案。「五〇ペンスのチヨコを返して、クシ一本を入れる、もしくは、一ポンド程度ならボディシャンプーが買えるから、それでどう?」悩んで悩んで、「とりあえず、靴箱に買つものを入れてみよう」と、スーパーの片隅で、申し訳ない気持ちにドキドキしながら買つたものを詰める。と箱一杯に。「じゃあ、クシの方がいいよ。ボディーシャンプーは入らないし。」「チヨコレートは食べたら無くなっちゃうけどクシならチヨコレートよりも長く使えるから、それがいい。」と児童たち自身が納得して、最後の一品が決まりました。

男子チームは、買つ物に出かける前に、

ガ、リンス・イン・シャンプー、石けん、はみがき粉＆歯ブラシ、色鉛筆二四色セツト、メモ帳、チョコレート、お菓子、一二ポンド以内でうまく買ひながら、ざくざく詰めました。

一月一五日、クランリー教会での礼拜の前に、担当の方に、児童たちから渡して完了です。渡したクリスマスボックスは、協会の方達が車でルーマニアまで届けに行きます。輸送用の寄付二ポンド（一箱あたり）は、先生たちからの志。「いいなあ、こんなクリスマスボックス、私もほしいな小学生女の子の感想。みんなの少しずつのか気持ちが集まつて、素敵なクリスマスボックスが出来上りました。



数学科～因数分解コンクール

「因数分解はラジオ体操」因数分解コンクールの冊子には、そのように書いてあります。日本人が昔から親しんできたラジオ体操。今日では都会のオフィスでの音楽が流れることは珍しくなりましたが、長年日本人の健康を支えてきた習慣です。実は立教生は毎朝、当たり前のようにラジオ体操をしています。因数分解はそのラジオ体操と一緒に。当たり前のように、毎日コツコツと、頭の健康のためにやることです。

一学期が開始してすぐの食事の席で、何にでも全力投球の立教生が、私に「因数分解コンクール、勝負しましょ」と言つてきました。よし、やつてやろうと、生徒と一緒になつて取り組みます。因数分解に本気で取り組むのは高校時代以来のこと。さび付いた頭をなんとか動かします。毎日練習問題を解いていると、しだいに歯車が回り始め、「この時はこうしよう」と反応できるようになつてきました。昨日解けなかつた問題や、何分も考えた問題が解けたときはやはり気持ちが良いもの。解き終えた生徒たちは得意になつて、解法を解説し合つていました。皆で真剣に取り組む、この繰り返しが大切なのです。ラジオ体操は、毎日やつている人たちにとっては、何も考えなくても体が反応するものです。因数分解も、日々の積み重ねで反応できるようになります。

本番の六〇分間は、皆が集中を切らすことなく、ペンを走らせる音だけが聞こえました。六〇分で一〇〇問というのは大変で、かなりのハイペースでないと最後まで終わらせることができません。生徒たちはさすがに慣れていて、とても早い。少しはカンがよくなつた私ですが、柔らかい生

徒の頭の回転には、とてもついて行くことができませんでした。

成績優秀者の結果は速報として、その日のうちに発表されます。私も本気になつて取り組んだ因数分解。結果はさんざんたるものだったので、九〇点以上をとった生徒達の格好良さを心の底から理解しました。立教生はとてつもない能力をもつている。それは因数分解を毎朝のラジオ体操のようにコツコツと取り組む、その絶え間ない努力です。今回は不本意に終わつた生徒達も、来年は彼らのようになろう、そう思つたに違ひありません。私もその一人として、またコツコツとやつしていくつもりです。

英語科～インタビュー



のかということはある「婦人に尋ねたところ、「あなたたちは立教の生徒ね。実は昔、私は立教で英語を教えていたのよ。あなたたちが一生懸命英語を学んでいる姿勢がとてもよかつたわ。よかつたらクリスマスカードを交換しましよう。」そう言つて住所を教えてくださいました。この偶然の出会いと自分たちの英語が通じ、それが

相手の気持ちを動かすことができたとう二重の喜びがあつたようです。「先生、こんなことつてめつたないよね！」と話す生徒の表情は今学期のフィールドワークで一番の笑顔でした。

早速みんなで心を込めてクリスマスカードを書きました。お返事は冬休みを過ごした後、三学期のお楽しみです。来学期も新しいことにチャレンジして楽しく英語を学びましょう。

第二の故郷

高3-2 竹内 貫太
今回は今、自分が住んでいるオランダについて説明しようと思う。

Nederland「低地の国」

これがオランダ語でのオランダ国名だ。英語では、Netherlandsになる。

「世界は神が作ったが、オランダはオランダ人が作った」

と言われるように、海岸沿いに広がる湿地を干拓することにより、土地を広げてきた歴史がある。そのため、オランダは4分の1以上の土地が海面下にあり、何世紀にもわたって水と闘ってきた。

干拓とは、遠浅の海や干潟を仕切り、その場の水を抜き取ったり、干上がらせるなどして陸地にすることだ。

オランダの風景に必ずある堤防、風車、運河はすべてこの干拓に関係がある。

まず、堤防で水域を仕切り、何か所かに水門を設け、動力によって強制的に仕切り内の水を排水し干上がらせるのだが、そのときに動力として水車を使った。運河はくみあげた水を注ぎ込むために作られたものだ。オランダの地名にも干拓にまつわる名前が多くあり、ダム(堤防)という意味からアムステル川にダムを築き、都市を建設したアムステルダム、ロッテ川とマース川に流れ込む地点にダムを作つてできたロッテルダムなどが、わかりやすく代表的だ。

中学二年生のときに初めて訪れ、高校三年生になるまで住んでいた。自然に恵まれた美しい運河の街に、このように、水との闘いとも言えるオランダ人の苦労があった事を忘れてはいけないと思った。



Cambridge Science Workshop

山ある。プログラムごとに分かれての研究。いつも学校で行う実験は、誰かが成功した。今も改善の為に実際に研究を続けていきたい。今回のワークショップで学んだ事は沢山ある。丹葵

「はい。これから一分間、近くの人とこれについて話して。」
その時、私は、ここからワークショップは始まっているんだと実感した。ケンブリッジ大学にコーチで到着して少しした後、私達は大きなホールに召集された。その席は、自由だったが、あまり同じ学校同士の子で座つたり固まつたりはしてなかつた。それがまた後になつてみれば良かったなと思う。

オープニングセレモニーなので、ケンブリッジの歴史についてなどを紹介してもらつて終わるだろうと予想していた。確かに、教授の挨拶、そしてケンブリッジの歴史や入学方法の話があり、そこまでは予想通りだったが、次はまったく想定外の話だつた。教授が、ある二人の人を連れてきて紹介し、その女の人があれプレゼンを行うと言つた。その話は脳の話で、主に誤記憶の研究についての話だつた。

彼女の話は、とても興味深く、聞いて楽しめた。中盤辺りになると脳に関するクイズが始まつた。その時聞いたのがあなたの没頭の言葉だ。ある二つの脳の図を見せられ、それぞれ脳のどの部分を使つて人が表されていた。そしてそれが、どんな人の脳なのか。だから自分で考え周りの人と英語で意見を交換し合うというものだった。いきなり、これから一分でと言われた少し焦つたが、案外口は勝手に動いていた。ちゃんと理由も話す事が出来た。また、他の子の、自分とは違う意見がユニークだつたり、感心する事もあり、その話し合いが楽しかつた。この時、考える事の楽しさを学んだ。

高二一一 丹 葵



る内容だつた。そこには、結果の見えない実験の楽しさがあつた。コンピュータ・プログラミングで結果を予想する。そして、次に実験をする。もちろん最終的な結果は予想と異なる場合もあつた。そんな時、何故結果が違つたのか。自分達で考えその要因を導きだす。それがなにより楽しかつた。また、専門分野の内容はやはり難しいと感じた。知識が無い分それを頭にいれるのが大変だつた。正直辛いと最初は思つたりもした。学んだ事は多かつたが、一番大切なのは、何に對しても疑問を追求する事と、積極性の二つだと感じた。まだまだ世界には沢山謎がある。それを、一つでも解き明かしたい。その為に今私が出来ることをしつかりして、沢山の知識を身につけようと思つた。

UCL Grand Challenge Japan Project

“One world, one summer, one dream”

H3-1 Risa Suzuki

This summer I had the great honour to participate in the UCL Grand Challenge Japan Project. It was organized by UCL in order to celebrate the arrival of the Chōshū 5 and Satsuma students at UCL which symbolises the beginning of the friendship of England and Japan around 150 years ago. Many people in Japan would have probably glanced at me wondering why I participated in this project since it is my last summer before my university exam and I should better concentrate on my studies but I do not think that way. This is because this project was exactly what I have longed for. An opportunity to think and discuss about culture, the world and its future with its issues it is facing.

The greatest memory I have from this project is the day where UCL has prepared two discussions for the English and Japanese students.

One was all about comparing English and Japanese culture from many aspects. I was part of the group which discussed about stereotypes and I personally enjoyed this the most because the group was small and everyone was nice and open for jokes. It was not only the fact that I could make myself understood in English that made me happy but also the fact that I could enjoy my conversation which I held with the English students having a lot to laugh about. In my humble opinion this is something which is not easily be done as normally talking a non-native language is quite challenging and you do not have enough power to think about enjoying it. But this time it was different. Everyone was understanding about the difficulty of speaking another language and helped each other sharing jokes about stereotypes and ideas. The most satisfying point for me personally was that all of the members of my group agreed on adopting my idea of how to present the results of our discussion which made our presentation look like a little debate involving the audience.

The other one was called "future pioneers" and was all about the world and its future in relation to what we students think about it, how we are going to approach issues which exist in the society. I liked this discussion as its topic was kind of related to my dream profession. My dream is to do humanitarian work helping developing countries and I was able to express my opinion to other people and see their reaction as well as hear their opinions. As we were discussing topics like agriculture, discrimination, trade it made me think of developing countries and I feel like I have learned some new facts.

Through this project I felt like getting closer to my dream and it made me keener on fulfilling it. Therefore I am very grateful to have been able to attend it and I am glad to have met such nice people and I hope that I can form with them a new world.

「英語はツールだ」

高�一一 三村 美優

も堂々としたあの六人の姿、自分の能力を

鼻にかけない低姿勢は私に「本物」として

たちが考える移民問題のひとつの意見と

した。
「英語はツールだ。」

ない。何を思い、考え、伝えるかなんだ。

頭で理解していたつもりのこの言葉が突

然形を持ち、手でしつかりとつかめた気が

した。

自分のやつてきたことは間違つていな

かった。そう思つてことでよりこれから将

にに對して意欲がでた。寮に帰ると明らか

にその日の朝とは違う顔をしている仲間

をたくさん見た。勉強を積み重ねていく、

その日々の努力は大前提だ。だがやはり実

践に打ち勝つものはないんだ、身にしみて

感じた。そしてその実践の場に身をおくこ

とは容易なことではない。時間も費用も途

方もなくかかる。そこで自分の立場を振り

返るとやはり恵まれた環境にいると再確

認した。しかも立教英國学院は、日本人の

学校が海外にあるという性質上日本人で

あるという視点を基盤にして海外の空気、

教育に触れることができる。それはより祖

国の姿を浮かび上がらせるもつとも近い

道であることなのだと気がつくことがで

きた。

私は今週末に全校生徒の前で行うこの

プログラムの報告プレゼンテーションの

準備を今している。そこで今回得たもの、

そしてわたしたちが恵まれた環境に身を

おいでいることを再確認したこと、そして

これを使わない手はないということ。ここ

でのこの国での経験は私の血肉となりき

つと将来を豊かにする。そのことを多くの

人にわかつてもらえるよういいプレゼン

テーションにしたい。

私は派遺してくれた学校、両親に感謝し

てきました。新たに氣を引き締め将来の

展望を描きながら日々精進していきたい。

私はまだ学生としてしか生きること

はないがすごく共感できた。そして何より

か現実となるのだ、信じていてその言葉

が身近になつた気がした。そして海外で生

活していく中ではぐくまれていく祖國愛、

より日本人らしい、日本人としての意識と

誇り。私はまだ学生としてしか生きること

サリー大学と進学協定を締結しました。

十月一三日(火)、サリー大学(University of Surrey)と立教英國学院との間で、進学協定を締結、調印式を執り行いました。

サリー大学は、立教英國学院からほど近い Guildford にある総合大学で、最新のタイムズ紙の「The Times and Sunday Times Good University Guide 2016」で今年の University of the Year に選ばれた名門大学です。

特に学生の満足度がイギリスで最も高く、施設・設備が充実していることで知られており、世界大学ランキングでも上位に位置するトップクラスの大学です。

この協定により立教英國学院の生徒で在学中に一定の成績を修め、規定の英語資格を取得した者は、サリー大学の International Foundation Year のプログラムへ進学できます。このプログラムは二月から九月の半年コースか、九月から六月の一年コースがあり、修了後はサリー大学の各学部へ進学が可能です。イギリスの学士コースは三年間ですので、合計三年半または四年間で学位を取得することが出来ます。

イギリスの大学との進学協定は、一月に締結したUCLロンドン大学に次いでこれが二校目、日本の高校レベルでの提携は本校が最初となります。既に二〇一五年度より教育課程に英国大学進学コースを設置しており、今後もイギリスをはじめとする海外の大学への進学を積極的にサポートしていきます。



バレーボール部 BEDE'S CUP 女子、男女混合 総合優勝



Flower show is a riot of colour

THE 70th Ellens Green and Gardening Association Autumn Show proved to be a 'very successful' gathering of local horticultural and artistic talent.

Held in the Ellens Green Village Hall on Saturday September 12, summer still lingered in the hall, where visitors viewed a riot of colourful dahlias, roses, shrubs, fruit and vegetables.

The local art group

exhibited some of the year's work in media such as acrylic and watercolour.

Home fare exhibits included Woolton Pie based on a wartime recipe to mark the association's anniversary.

Association chairman Michael Clarke said: "No meteorological year is ever perfect for gardeners but 2015 provided a first class selection of prize-winning flowers and vegetables.

"We were particularly

pleased that the girls from Rikkyo School submitted floral arrangements. Their exhibits were stunning."

The prizes were presented by Dr David McKenzie from the Rudgwick Medical Centre.

Kate Robertson, honorary secretary, said: "Ian Clemens won most of the silverware. His dahlias would have held their own at Chelsea and his elephant garlic lived up to its name."

フラワーアレンジメント部 地元の新聞に掲載

